

元気を鼓舞する実践を

上うえ 廣ひろ 榮えい 治じ

晴れわたった秋空を渡る風に乗って、どこからかブラスバンドの演奏が聴こえてきます。運動会の音楽でしょうか。陽気で賑やかで浮き立つような気分にはさせられません。

ものの本によれば、日本人が管楽器による西洋音楽に興味を持った最初は、幕末、薩摩藩が鹿児島湾で英国艦隊と戦った際、敵の軍艦上で士気を鼓舞する音楽が吹奏されたときだそうです。沿岸の砲台から大砲を発射していた薩摩藩士たちは、敵が奏するこの音楽に感動したらしく、その六年後の明治二年には、藩士三十余名を横浜の英国海軍軍隊長のもとに派遣して、軍楽の伝習に当たらせています。

私たちがブラスバンドの演奏を聴いて、なんだか浮き立つような気分になってしまうのも、そもそもこの種の音楽が人の元気や勇気をかき立てるためのものであったからに違いありません。

音楽に限らず、何事についても言えそうですが、人の心を揺さぶるものには、吹奏楽のように人の元気を鼓舞するものと、弦楽曲のようにセンチメンタルな気分を誘うものとの二つがあるように思います。

そしてもちろん、わが会の活動も人の元気を奮い起こすものでなければならぬと思うのです。

では、私たちはどのようにして、周囲の人たちの元気を鼓舞したらよいのでしょうか。

私がこれまでに接してきた人々のなかにも、実に見事に周囲を元気にさせて、喜んで働かせる名人が何人もいらつしました。そして、これらの人々にはいくつかの共通点があつたのです。

その第一は、自らがまるで吹奏楽のように、積極的に元氣いっぱい、常に陽気さと上機嫌を失わなかつたということです。周囲の人々は、その元氣と陽氣をもらつて、体内の元氣を鼓舞されていたように思えます。その人と共にいると、その笑顔に感染して、いつの間にか微笑んでいる。何となく希望が湧いてくる。不安から解放されて楽な気分になる。つまり元氣になつてくるのです。

こうした人たちは、どんな不幸にあつても明るいほうに転じてしまう能力を持っていたように思われます。例えば、吉田松陰しゅういんの母親が、こうした特殊な能力を持っていた人だといわれています。どんなに辛い家庭内のできごとでも、彼女は軽妙な狂歌に詠よんで家中を笑わせる。彼女が叩く樽のリズムに合わせ、子どもたちが踊るなどという風景が日常のようであつたといひます。

息子の松陰はやがて幕府の禁を破つて刑死するのですが、彼女はそうした不幸さえも天性の上機嫌さで乗り越えて、孫たちに「松陰叔父にあやかりなさい」と陽氣に教訓して、八十四歳という当時としてはたいへんな長寿を全うしています。

第二の共通点は、いかに自分が偉かろうと決して驕おごらず、周囲の人々を自分よりも優れているかのように遇したということです。「人を立てる」ということを、ごく自然に行なつたのです。

黒澤明監督の名作『七人の侍』に、山賊の襲来から村を守る侍たちを選ぶ場面で、「人を立てる」事例が出てきます。加えてほしいと願う前髪立ちの少年武士を推した三船敏郎扮する主人公が、「子ども

は大人よりも働くぞ。もっともこれは大人扱いしてやればの話だが」と言う場面があります。たしかに少年であれ未熟者であれ、一人前扱いにして「立てて」やれば、下手な経験者よりも大きな働きをするものです。反対に軽蔑的に扱えば、彼の元気を殺ぎ、反発と反抗が返ってくるだけです。

先ほど松陰の母の話をしましたが、松陰自身も子どもにまで敬語を使い、誰彼なしに優れたところを探しては、とにかく褒める「褒め上手」だったといえます。「堂々たる国士」「識見氣迫、他人及ぶ無し」「防長年少第一流の人物」などと折り紙を付けられた弟子たちは、いずれも実力以上の活躍をし、のちに明治政府の中枢になっていきます。

あるいは中国の『三国志』には、劉備玄德が諸葛孔明の草庵を三度訪ねて教えを請う有名な話があります。もし、この王侯の態度が「三顧の礼」の反対で高圧的なものであつたとすれば、賢者は彼に仕えることなく、その後の大活躍もなかつたはずです。

第三の共通点は「不平や小言を言わない」ということです。西洋のことわざに「不平と小言は、一鍬ごとに家庭に墓穴を掘っていく」とあるそうですが、先代会長はこのことわざを「実に名言だ」と言って、しばしば口にしておりました。そして、「家庭は幸福を見出すところではなく、幸福を産み出し、創り出すところ」で、「すべてを産み出すのは自然においては大地、人倫においては婦人」なのだから、「婦人が家庭で不平不満を口にしているのは、その家庭はたちまち惨めなもの、不幸なものになってしまう」と諭されました。

不平不満というものが、どれほど人の元気を殺いでしまうことか、たぶん皆さんも一再ならず経験なさっておられることと思います。家庭の中心である主婦が家族の欠点をあげつらい、亭主を立てることなく、その働きに不平不満をぶつけるとすれば、その家庭は暗く沈んだ、仕合わせからはほど遠いもの

になつてしまふのは当然です。

先の吉田松陰の母親のような人が家庭の中心に座っている場合と比べてみれば、その差はまことに歴然としています。松陰の家は貧窮を極めた下級武士で、彼女が嫁いできたときには、わずか二間の掘つ立て小屋に舅と中風で寝たきりの姑、それに夫の妹までが病気で寝ていたといひます。その生活は武士とは名ばかりで貧しい農家と変わらず、朝暗いうちから一家総出で畑を耕し、娘は四歳の頃から炊事の手伝い、男の子は野良仕事の合間に畦に正座して素読をするというありさまでした。

そんな状況のなかで、彼女はよく病人の看病をしながら、一家に明るい笑いをもたらし続けたのです。もし、こうした生活に不平不満を言うとするれば、一日中狂乱し続けても足りなかつたに違いありません。しかし、不平不満というものは氣の持ちよう、当時の松陰の母の状況からみれば、まるで天国のような今日の生活に対しても不満だらけで、一日中不平をもらしている人はたくさんいます。

物事を明るい側面で捉える人が、どんな厳しい条件下でも元氣を失わないのと同じように、物事の暗い側面ばかりに向かう心は、いかに恵まれた環境でも、ちゃんと不平不満の種を見つけ出すのです。

そして、前者の周辺には明るい元氣が育まれ、後者の周辺には重い腐臭が漂います。

もちろん、我も人も人の仕合わせを目指すのが会の会友のご家庭は、陽気な元氣に包まれているはずで、す。そして言うまでもなく、各地域の会場も「仕合わせを産み出し創り出す場」となっているに違いありません。否、そうでなければならぬのです。

もし万一、あなたの会場が不平や不満の場になっていたら、それを言う側も言われる側も、根本的な猛省をして、ただちに元氣を鼓舞する会場に立て直さなければなりません。

社会全体に元氣を鼓舞する、今の日本に最も必要なことは、まさにそのことだと思つてあります。